

# CERAMICS JAPAN

BULLETIN OF THE CERAMIC SOCIETY OF JAPAN

## セラミックヒストリー 100選

### 陶磁器



公益社団法人 日本セラミックス協会

## セラミックス誌のやきもの・工芸関連特集連載をまとめて

1966年1月に創刊されたセラミックス誌は、業界一般を対象とし、会員の興味を引く記事、現場に役立つ記事を中心に編集されている。ここに収録されたものは1300余ページに及ぶ50年間の特集の集大成である。なかでも「シリーズ 日本の窯業民俗」は、1つの陶産地の記事が、数か月から1年にわたり解説され、1974年1月号より1994年9月号まで20年余にわたり連載された。このような、伝統的やきものや工芸ガラスを扱う「工芸」関連ページも、製陶関連の会員、特別会員の減少につれ、2000年以降は記事を見る機会も減少した。代わりに2008年3月号から連載されているコラム「ほっと」springは、モノや土地、人という「源泉」を紹介する欄として、現在に至っている。

博物館関連の過去の記事は、市町村合併にともなう名称変更や閉館、移転再整備されている場合もあるので注意されたい。また、陶産地の現場事情も、連載が完結してからかなりの年月が経過しているため、陶業者の休廃業もあるかもしれない。現地を訪れる場合、ホームページの調査や関連機関等への問い合わせで最新の情報を確認してほしい。

過去の記事をまとめるに当たり、本会会員をはじめ、著名な博物学者、陶芸家等、多くの協力者から玉稿を賜ったことがよくわかる。先人の業績をはじめとする歴史的な事実は、今でも色あせることはない。今一度連載記事を読み直してみるのもおもしろい。本書では、下記連載のうち1～6について全部を収録した。次ページ以降に各特集の概要を記載する。

1. 窯めぐり 橋本 謙一
2. 窯郷めぐり 戸田 榮
3. 美術館めぐり
4. シリーズ 日本の窯業民俗
5. 陶磁器資料館めぐり
6. 博物館めぐり

・ほっと Spring (継続中) 非収録

ここで紹介する記事は、セラミックス協会の会員であれば、IDとパスワードを使って協会ホームページより閲覧・ダウンロードが可能である。本誌のA4化は2001年以降、グラビアページの一部カラー化は1991年以降である。製版・印刷技術の未熟さで、創刊当時の写真は見づらいかもかもしれないが、ご理解いただきたい。

- ・セラミックス誌は、会員向け情報誌で、オープンアクセスではありません。
- ・用語・固有名詞等、現在では不適切な表現が含まれる場合もあるが、執筆者の意図を尊重し当時の表現のままである。
- ・企業名、市町村等の行政組織名称も出版当時のままであることを付記する。

日本セラミックス協会 出版委員会 稲垣 順一



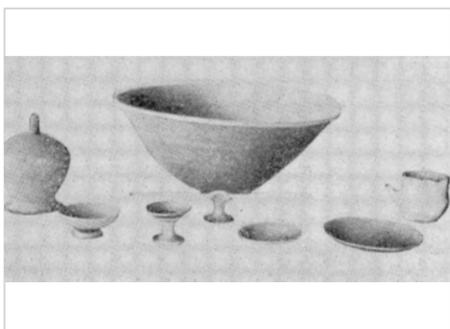
▶ 各内容の詳細は各記事の囲みをクリックしてご覧ください。

# 1. 窯めぐり 橋本 兼一

平衡状態図の著書で高名な橋本兼一博士の連載シリーズである。シリーズが始まる前に、同氏による著作「神宮の御料土器」、「民窯とは何か」があるので、あわせて紹介する。窯めぐりは、研究者の視点から、一般の陶芸書に書かれていない原料の特性、産地独特の特徴的な成形法についても言及され、改めて読み返してみると非常に興味深い。

## 窯めぐり

### 神宮の御料土器



(伊勢) 神宮の祭祀で使われる御料土器について、原材料―成形―焼成について詳しく説明されている。神宮では、年に約10回の大きな祭と毎日2回の御腰供進のために多くの土器が用いられ、それらは現在も古式のままに作られている。

CERAMICS JAPAN 1 [1] 37-39 (1966)

## 窯めぐり

### 民窯とは何か



柳宗悦やバーナード・リーチの始めた民芸運動と民窯について説明されている。さまざまな民芸団体、陳列館にも言及されている。江戸末期の京焼名工、青木木米の急須が倒立するといういわれについて言及されているのも興味深い。

CERAMICS JAPAN 1 [2] 82-86 (1966)

## 窯めぐり

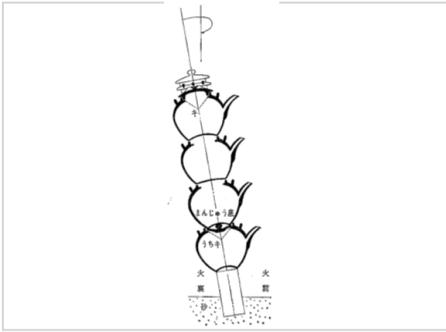
### 山陰地方の窯めぐり

山口県の「萩焼」坂倉新兵衛窯、坂高麗左衛門窯、島根県の「出西焼」、「石州瓦」、「布志名焼」、出雲焼「楽山窯」、鳥取県の「袖師焼」等、16の窯元について、その成立や作品について解説されている。

CERAMICS JAPAN 1 [3] 149-153 (1966)

## 窯めぐり

### 関東の民窯

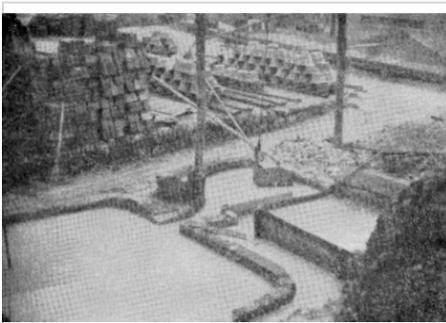


京焼の名工尾形乾山が栃木県佐野市に下向した際の、佐野乾山について触れている。栃木県「益子焼」、茨城県「笠間焼」の解説や関東ローム層が広く分布し、原料がなく民窯の成立が困難であったと述べられている。

CERAMICS JAPAN 1 [4] 231-234 (1966)

## 窯めぐり

### 四国地方の民窯



愛媛県「砥部焼」の他、高知県「安芸焼」、仁清やその弟子も作陶した香川県では、「御厩焼」等、四国地方の窯について述べられている。とりわけ「砥部焼」は、当時の磁石（砥部陶石）の分析値も掲載されており、砥部磁器の研究者にとって有益である。

CERAMICS JAPAN 1 [5] 297-301 (1966)

## 窯めぐり

### 近畿地方の窯めぐり

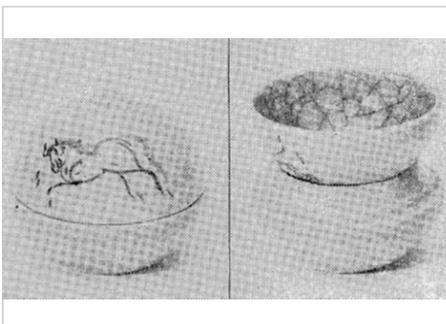


京焼を除く兵庫県と三重県の窯について述べられている。兵庫県は「出石焼」、丹波「立杭焼」等を、三重県は「伊賀焼」、古萬古～有節萬古、「(四日市) 万古(萬古) 焼」およびその流れをくむ「阿漕焼」等についてその成立や製造方法が解説されている。

CERAMICS JAPAN 1 [6] 375-381 (1966)

## 窯めぐり

### 東北地方の窯めぐり

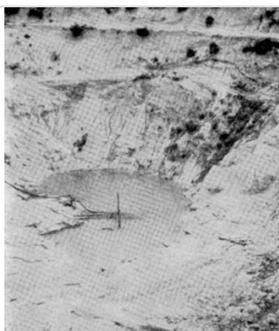


福島県会津陶器略史や、「本郷焼」、全国でもめずらしい二重造りの「相馬焼」の他、宮城県「堤焼」、山形県「平清水」、 「本間焼」、秋田県「檜岡」、岩手県「小久慈焼」、青森県「津軽焼」といった各県の民窯についても述べられている。

CERAMICS JAPAN 1 [7] 461-468 (1966)

## 窯めぐり

### 東海地方の窯めぐり



愛知県「常滑焼」,「瀬戸焼」の他,「犬山焼」や「七宝」,岐阜県「美濃焼」について述べられている。常滑焼や瀬戸焼の成立や,瀬戸焼の陶祖加藤四郎左衛門(藤四郎)についての記述もある。美濃焼は志野や織部について記述されている。また,象牙の代わりに陶製の茶入蓋に関する言及も興味深い。

CERAMICS JAPAN 1 [8] 562-569 (1966)

## 窯めぐり

### 京都とその近県の窯めぐり

平安朝の頃から造られている幡枝土器,京焼として名高い「栗田焼」,「清水焼」の他,遠州七窯のひとつの「朝日焼」,奈良県の「赤膚焼」,滋賀県「膳所焼」,「信楽焼」について述べられている。歴史的な読み物として「仁清」,「乾山」,「奥田頼川」といった京焼の陶工についても記述がある。

CERAMICS JAPAN 1 [9] 650-656 (1966)

## 窯めぐり

### 北陸地方の窯めぐり

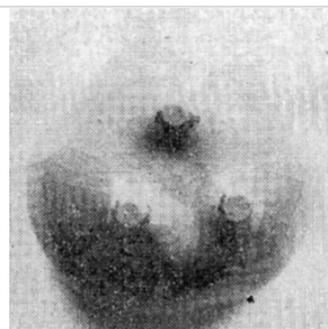


石川県「九谷焼」,新潟県「無名異焼」の他,福井県や富山県の民窯について記述されている。九谷焼は,古九谷以前から九谷再興の青木木米といった歴史を語っている。能登の「珠洲焼」は,本稿が発表された以降の再興のため,記載がない。飛騨の「渋草焼」もここに掲載されている。

CERAMICS JAPAN 1 [10] 811-818 (1966)

## 窯めぐり

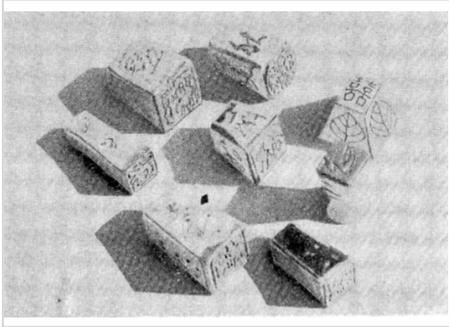
### 九州地方の窯めぐり



佐賀県「唐津焼」中里太郎衛門窯,「有田焼」柿右衛門,福岡県「上野焼」,遠州七窯「小石原焼」,大分県「小鹿田焼」,鹿児島県薩摩焼の「竜門司焼」,沈壽官の「苗代川焼」について記述されている。原料は九州磁器の泉山,天草の各陶石について解説があり,磁器の成立が詳しく述べられている。

CERAMICS JAPAN 1 [11] 896-905 (1966)

## 窯めぐり



岡山県「伊部焼」(備前焼) や人間国宝「金重陶陽」氏についての記述がある。日本磁器の成立に関する異説が述べられている他、コバルト原料の回青、祥瑞についても本稿で述べられている。北海道の窯業事情、執筆者が有名な陶産地ではなく、小さな民窯を中心に解説した理由も述べられている。

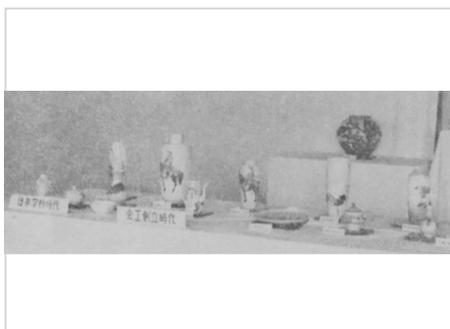
CERAMICS JAPAN 1 [12] 1009-1016 (1966)

## II. 陶郷めぐり

陶産地めぐりの好きな執筆者が、毎号各地域を回り陶産地の窯屋の主人や公設試験研究機関を訪ね歩いた紀行文。執筆者の雑感も交えて全11回の連載で語られている。伝統的な陶磁器産業だけでなく、地方の窯業事情についても述べられている。昭和40(1965)年代の窯業事情も合わせて知ることができる。当時は東海道新幹線がようやく開業10年を迎えたが、全国的な高速鉄道網もまだ整備されておらず、フットワーク良く陶郷めぐりができたわけではないようである。

### 陶郷めぐり

### 福島，山形地方

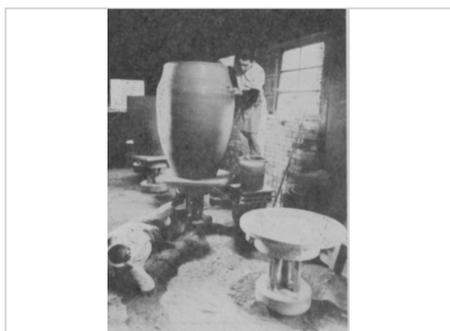


福島県会津の焼物紹介では、会津工業高等学校窯業科や福島県工芸試験場(当時)窯業課を訪問し、産地の現状を尋ねたり、本郷町の本郷焼を訪れている。続いて山形を訪れ、山形県工業試験場、平清水焼や山形タイルを見学している。

CERAMICS JAPAN 4 [8] 690-692 (1969)

### 陶郷めぐり

### 四国地方

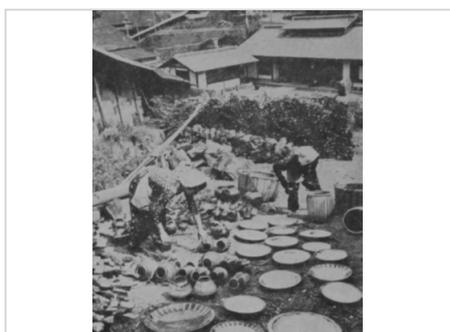


和歌山港を出航・・・当時は本四連絡橋のない時代で、四国に旅行するには船を利用する。今では考えられない交通事情。徳島工業試験場、鳴門市の大谷焼、高松地方の陶管製造事情がわかる。当時は常滑だけでなく、全国で陶管の製造がおこなわれていた。

CERAMICS JAPAN 4 [9] 795-798 (1969)

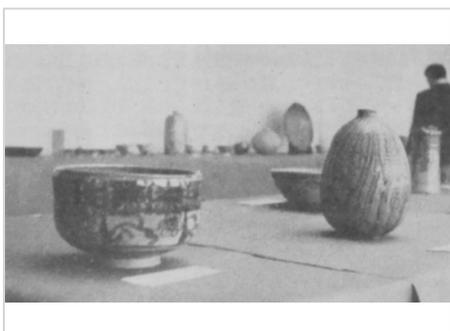
### 陶郷めぐり

### 九州北部



民芸で名高い福岡県「小石原(こいしわら)焼」や大分県「小鹿田(おんた)焼」のような、バーナード・リーチも訪れた民芸窯を紹介している。ペットボトルにとって代わられ、今では使われることのなくなってしまった白石窯の陶製汽車土瓶。昭和40年代でも、プラスチック製土瓶が普及し始めてきている。

CERAMICS JAPAN 5 [9] 784-789 (1970)



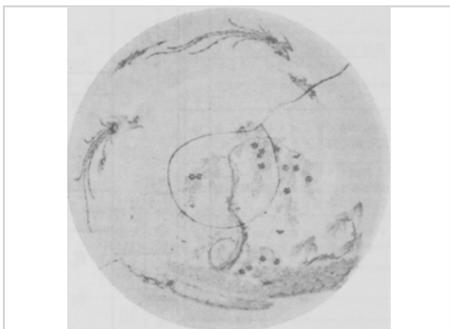
山陰鳥取地方は、それほど大規模な焼物はない。鳥取県工業試験場を訪問した後、「因久山焼」は、江戸期明和の頃、京焼陶工の清水六兵衛が鳥取藩池田侯に招かれて始まった。この地方は家内の工業の域を出ていないが、倉吉周辺の「上紙山焼」等の小さな窯も執筆者は丹念に回っている。

CERAMICS JAPAN 6 [4] 292-297 (1971)



白磁および赤絵発祥の佐賀県「有田焼」、長崎県「波佐見焼」を紹介している。今回は、長崎県窯業技術センターや佐世保の「臥牛窯」、大手の白山陶器の他、波佐見地方の窯を紹介している。三股陶石、天草陶石についても述べられている。

CERAMICS JAPAN 6 [7] 547-551 (1971)



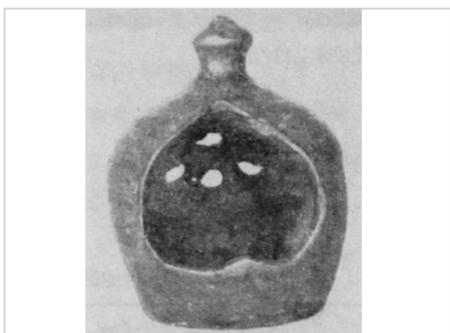
前回の続きで、佐賀県「波佐見焼」を紹介している。昭和40年代の泉山陶石の現況も興味深い。また、佐賀県窯業試験場や歴代酒井田柿右衛門、香蘭社について述べられている。17世紀より続く柿右衛門に関して、初代～13代（当時、2014年に15代襲名）の年表が合わせて掲載されている。

CERAMICS JAPAN 6 [8] 624-630 (1971)



堺市にある4世紀の須恵器の遺跡について述べられている。泉北丘陵には、およそ1600年前の古墳や窯跡が1000基以上群集している。古墳時代中期の陶邑窯跡群として整備され、府立の泉北考古資料館に出土品が展示されている。

CERAMICS JAPAN 7 [5] 356-358 (1972)



福井県越前焼は、六古窯の一つに数えられ、古くから焼物が盛んであった。福井県陶芸館、越前陶芸村、窯元、粘土瓦工業組合の紹介の他、福井県で産出する窯業原料にも触れられている。福井県産出の原料についても調査を行っている。

CERAMICS JAPAN 7 [8] 630-634 (1972)



石川県九谷焼は、old Japan ware とか old Kaga ware として世界によく知られていた。有田、仁清と並ぶ上絵付の産地で、17世紀末に一時廃絶し、京焼陶工の青木木米により再興された。石川県工業試験場、日本硬質陶器（現 ニッコー（株））訪問記や石川県の窯業事情、教育事情も述べられている。古九谷のルーツにも言及されている。

CERAMICS JAPAN 8 [2] 128-137 (1973)



古代文化発祥の地の一つ島根県について、茶陶としてもよく知られている楽山窯、袖師窯、出西窯、布志名焼等の各窯元を始め、石見の来待瓦の窯や島根県工業試験場を訪れている。島根地方の原料である来待石や石見陶器、出雲勾玉の玉造等、興味深い調査を行っている。

CERAMICS JAPAN 8 [4] 298-304 (1973)



近世関東の窯業の歴史は比較的新しい。笠間焼は、江戸時代安永年間に開窯され、江戸の雑器需要に応えていた。茨城県窯業指導所の訪問の他、浜田庄司の民芸で有名な茨城県笠間地方、周辺の小さな窯元も丹念に訪ね歩いている。合わせて、第一回で紹介できなかった、会津大堀相馬焼についても紹介されている。

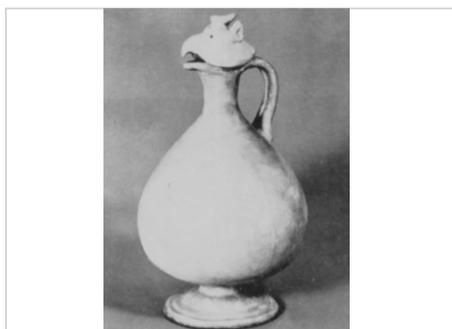
CERAMICS JAPAN 9 [2] 127-131 (1974)

### III. 美術館めぐり

日本各地にある美術館・博物館のなかから陶磁器を収蔵している館にスポットを当て、各館の高名な学芸員諸氏に解説を寄稿してもらっている、名称の変更等、現在と異なる記述に関しては、各解説を参照いただきたい。協会ホームページ上ではグラビアページが別ファイルになっている場合もある。

#### 美術館めぐり

#### 東京国立博物館



長谷部楽爾氏の解説。東京、奈良、京都、九州に立地する国立博物館ではさまざまなコレクションの企画展示を行っているが、収集品の多さから陶磁器の企画展がなかなか開催されない。本稿では、館蔵品の概要について述べられている。現在は、東博コレクションの一部を画像で楽しむことができる。

参考 URL <http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/>

CERAMICS JAPAN 4 [5] 416-417 (1969)

#### 美術館めぐり

#### サントリー美術館



山口久吉氏の解説。執筆当時は、開館7年を迎えた新しい美術館。同館は、現代の我々の日常生活、衣・食・住につながる昔の美術品の収蔵に力点を置いている。本稿では、館蔵の志野焼、織部焼といった桃山陶の解説を行っている。

CERAMICS JAPAN 4 [6] 510-511 (1969)

#### 美術館めぐり

#### 出光美術館とガラス・ペルシア陶器



三上次男氏の解説。出光コレクションは、禅僧の仙厓が有名である。本稿では、同館のコレクションのうち、ペルシア陶器・ガラスについて説明されている。現在は、東京と門司に立地しているが、解説時は、開館されて間もない頃の概要である。東京館のいつでも見られる陶片コレクションも有名。

CERAMICS JAPAN 4 [7] 605-606 (1969)



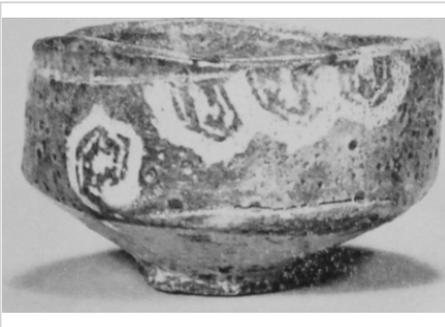
白木原和美氏の解説。昭和24年(1949)以降は天理大学の付属博物館として天理参考館と称し、現在に及んでいる。はじめは民俗資料の蒐集が中心であったが、後に考古資料にも意が用いられるようになった。ここでは、シリアやペルシャガラス、トンボ玉を紹介している。

CERAMICS JAPAN 4 [8] 696-698 (1969)



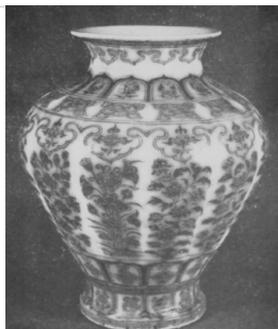
前田泰次氏の解説。前身は、東京美術学校。現在は大学美術館ができ、東京藝術大学大学美術館陳列館となっている(美術館企画展開催中公開、執筆当時希望者は無料で入館できた。)館蔵品の陶磁器、ガラスはそれほど多くないが、本会会員で大日本窯業協会誌に数々のやきもの関連の寄稿をされている塩田力蔵氏の貴重な資料が残っている。

CERAMICS JAPAN 4 [9] 778-779 (1969)



竹内順一氏の執筆。東急電鉄元会長故五島慶太翁のコレクション。陶器は、全館蔵品の10分の1くらいであるが、茶器(茶陶)、茶道具に秀逸なものが多い。それ以外の陶器にも(便宜上鑑賞陶器とよぶ)見どころが多い。

CERAMICS JAPAN 4 [10] 876-877 (1969)



磯野風船子氏の解説。所在は千代田区神田駿河台2丁目9-9日本醫事新報社ビル。小さな美術館だが観賞陶磁と古典籍を中心に所蔵。宋磁のコレクションが多く、重文・定窯白磁牡丹唐草文鉢、重文・青磁砧形花生を所蔵。元代陶磁では、世界に2つしかなく、しかも大英博物館の所蔵品より優れている重文・釉裏紅草花文大壺が見どころ。

CERAMICS JAPAN 4 [11] 950-951 (1969)

## 美術館めぐり

### 日本民芸（藝）館



白崎俊次氏の解説。日本、朝鮮、中国その他、海外の民芸品を陳列公開している美術館。西館は民芸運動で有名な旧柳宗悦邸を利用している。浜田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ等の現代陶芸家や芹沢鉦介、棟方志功等の染色品や版画を陳列。

CERAMICS JAPAN 4 [12] 1032-1033 (1969)

## 美術館めぐり

### 根津美術館の陶磁



奥田直栄氏の解説。故根津嘉一郎氏のコレクションを基幹とし、氏の収集の個性を強く反映している。嘉一郎氏は、自ら青山と号し茶道への執心もただならぬものがあり、館蔵の陶磁の中心もやはり茶陶である。

CERAMICS JAPAN 5 [1] 34-35 (1970)

## 美術館めぐり

### 京都国立博物館の陶磁器



河原正彦氏の解説。明治維新後、古美術に対する関心が希薄になり多くの寺院は荒れるにまかされていた。京都御所内の旧御米倉で社寺伝来の什宝等を展示する恒常施設が設けられ、これが京都における博物館施設のはじまりである。当時の欧化主義の流行によって顧みられなかった古社寺伝来の名宝や歴史資料を「古器旧物保存」の目的で、調査・収集・保存する。

CERAMICS JAPAN 5 [2] 126-127 (1970)

## 美術館めぐり

### 有田陶磁美術館



徳見知孝氏の解説。佐賀県西松浦郡有田町にある陶磁器専門の町立美術館。有田町歴史民俗資料館の施設で昭和29年(1954)に開館した。建物は明治7年(1874)に建てられた焼き物倉庫を利用したもので、外壁は石蔵で内部が木造二階建て、李参平から始まる有田焼の歴史や館蔵「染付有田皿山職人尽くし絵図大皿」には、当時の様子が描かれている。

CERAMICS JAPAN 5 [3] 208-210 (1970)



伊藤威夫氏の解説。博物館の出来立ちは、コレクションに基づいたものでなく、展示本位のみでなく、諸施設の維持保存をも兼ね、ほかの美術館とまったく異なった性格をもつ。比較的質もよく、年代も揃っているのは、中国古陶磁である。仰詔土器で一名アンダーソン土器といわれ、紀元前 3000 年から 2000 年ぐらいの新石器時代のものが多い。

CERAMICS JAPAN 5 [4] 302-304 (1970)



青木重雄氏の解説。中国殷・周時代の青銅器コレクションを連想する人が多いだろうが、中国陶磁、とりわけ宋・明代の諸名器も多く所蔵している。先々代故嘉納治兵衛氏は、茶道に熱心で、雅号を「鶴庵」「鶴堂」とも呼ぶ名だたる茶人の一人だったので、館蔵の茶器には茶人の見識のこめられたものが多い。

CERAMICS JAPAN 5 [5] 392-392 (1970)



衛藤駿氏の解説。彩陶土器をはじめ、黒陶の甕や鏡、戦国時代の鬻(き)、白陶、灰陶、漢の緑釉、六朝の越州窯青磁等学界注目の資料がそろっている。唐三彩から宋磁、元、明に至るまで多くを所蔵。乾山自筆の陶法伝書「陶工必用」は日本陶磁史の重要資料であり、解説付の原寸複製を発刊している。

CERAMICS JAPAN 5 [6] 458-459 (1970)



内山武夫氏の解説。東京国立近代美術館の京都分館として発足後、昭和 42 年 (1967)6 月に独立して現在に至る。京都は工芸品を中心に収集されている。有名な河合寛次郎コレクションの他、近代の陶芸を代表する優秀な作品が多く見られる。板谷波山、浜田庄司、荒川豊蔵、金重陶陽、清水六兵衛、楠部弥弼等も注目される。

CERAMICS JAPAN 5 [7] 572-573 (1970)



佐藤雅彦氏の解説。個人コレクションの寄贈または購入によるものが多く、仏教美術、エトルリア等地中海文明の美術、充実した中国の絵画や書、江戸期・明治以降の絵画・金工・漆工・陶磁等数多く所有する。同市には、安宅コレクションを中心とした「東洋陶磁美術館」もある。

CERAMICS JAPAN 5 [8] 662-663 (1970)



藤井善三郎氏の解説。私立博物館の草分け。漢代緑褐釉陶は青銅器の味があり、重厚さ、力強さ、美しさ等強烈な迫力でせまる。釉の銀化の美しさだけでなく、ユニークな器形、家畜や鳥類の表情に親しみが感ぜられ当時の人々の生活がしのばれる。

CERAMICS JAPAN 5 [9] 794-795 (1970)



熊沢五六氏の解説。尾州徳川家の世襲什宝として伝えられたものが主となっているから、おのずから茶器が多い。茶入、茶碗、花活、水指、香合、会席道具等中国、朝鮮、東南アジア、日本と広範囲にわたり、名物ものとして桃山時代から大切にされていたものがそろっている。

CERAMICS JAPAN 5 [10] 878-879 (1970)



永竹 威氏の解説。佐賀県は、(旧肥前国内) 日本の窯芸史の展開の中で、特異な位置にある。九州陶芸の源流ともいえる古唐津系の諸窯と肥前磁器系の諸窯が、現在 120 基内外が確認されていることから見ても、日本的比重は大きい。

CERAMICS JAPAN 5 [11] 982-983 (1970)



越中哲也氏の解説。長崎市立博物館は、明治12年(1879)アメリカ大統領グラント将軍の長崎訪問を機に開設されたわが国初の博物館の一つ。時代の変遷に伴って盛衰をかさね、館の名称も建物も転々としている。長い歴史を持つ博物館であるので長崎系古美術を代表する各種資料は数多く収蔵されている。デジタルアーカイブ：長崎県美術館と長崎歴史文化博物館(旧香港上海銀行長崎支店記念館および長崎近代交流史と孫文・梅屋庄吉ミュージアム資料を含む)。

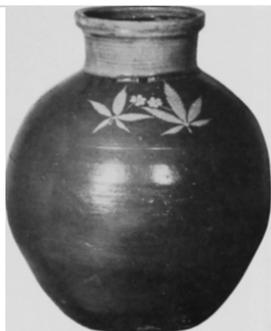
URL <http://www.nmhc.jp/search.html>

CERAMICS JAPAN 5 [12] 1058-1059 (1970)



展示内容は、3展示室において中国陶磁器を時代別系統的に展示し、2階の第4室では茶陶を、第5室に日本の色絵磁器を主として展示している。桃山時代の美濃陶である志野、織部、黄瀬戸に加えて、備前、伊賀、薩摩、高取等の日本陶を展示。

CERAMICS JAPAN 6 [2] 126-127(1971)



青木重雄氏の解説。丹波焼の名前は今日では全国的に知られるようになったが、かつては六古窯のしんがりの存在として、瀬戸、信楽、備前、常滑等比べてあまりパツとしないやきもののように扱われがちだった。古丹波の他、三田青磁等、兵庫の焼物を収集、展示している。

CERAMICS JAPAN 6 [3] 208-209 (1971)



玉屋は大正8年(1919)開業の古いのれんを誇る百貨店。田中丸善八氏が蒐集した古陶磁コレクションで、古唐津、高取、上野、伊万里、鍋島、柿右衛門、薩摩等、九州陶磁の主要な窯をほぼ網羅。現在は、田中丸コレクションより、九州国立博物館ならびに福岡市美術館に所蔵品が寄託されている。

CERAMICS JAPAN 6 [4] 282-283 (1971)



新 規矩男氏の解説。記念館は埼玉県川越市の北方約 12km 比企郡川島村にある。日興証券の相談役遠山元一翁が、母堂の晩年の安住の居宅として建てられた和風の家屋が中核。茶道具ではいうまでもなく、陶磁器が多い。大名物玉垣茶入、中興名物茄子茶入、長次郎黒茶碗（銘大威徳）をはじめ、砧青磁の犬鷹香合、古赤絵金欄仙盤瓶、その他がある。

CERAMICS JAPAN 6 [5] 382-383 (1971)



宮坂英式氏の解説。縄文文化は、その中期に中部山岳地帯を中心に繁栄し、文化圏を築いた。その背梁の一翼である蓼科、八ヶ岳両山脈の西山麓に、極めて濃厚な足跡として南北 20km にわたる高原地帯に二百有余の縄文遺跡を残した。

CERAMICS JAPAN 6 [6] 452-453 (1971)



見市 實氏の解説。閑静な芦屋市の山の手に在り、六甲連峰を墨絵のように背景にした高台に、滴翠美術館がある。長次郎作（名物）赤染茶碗 銘『勾当』、仁清作色絵菊水水指（重要美術品）、古九谷色絵鶉文大皿の名品をはじめ、京焼、紅州焼等国焼陶器が多い。

CERAMICS JAPAN 6 [7] 536-537 (1971)



芥 唯雄氏の解説。畠山記念館は、畠山即翁が長年にわたって蒐集した美術品を、安全に保存し、あわせて一般の鑑賞研究に資するために、公開する財団法人の美術館である。東洋の古美術品、ことに茶器を中心として、それにふさわしい落ちついた雰囲気の中かで鑑賞できる茶の湯専門美術館。

CERAMICS JAPAN 6 [8] 614-615 (1971)

### 美術館めぐり

## 岡山美術館のやきもの=現, 岡山県立美術館



大熊立治氏の解説. 岡山の人たちは“やきもの”が好きである. 岡山美術館の資料はまことに多彩で, 備前刀を中心とした刀剣, 備前池田家伝来の能衣装, 大名家の蒔絵調度, 絵画書蹟, 甲冑, 中国の漆工芸等があるが, 400点にのぼる中国陶器, 200点の日本陶器, それにお国ものの備前焼も重要な柱である. 他に, 備前市立備前焼ミュージアム(旧, 岡山県備前陶芸美術館)もある. デジタルアーカイブ URL <http://210.236.99.45/webmuseum/>

CERAMICS JAPAN 6 [9] 702-703 (1971)

### 美術館めぐり

## 逸翁美術館の陶磁



安川 剛氏の解説. 逸翁美術館は阪急グループの創立者の小林一三翁(逸翁と号す)のコレクションを基とした美術館. 欧米各地に見られる特色ある小美術館を日本の地方都市にも普及させたいという逸翁の遺志を実現させたもので, 阪急池田駅から10分あまりの五月山の麓にたたずんでいる. 所蔵品の中で陶磁器は約1500点であるが, 種類の豊富な茶陶が中心.

CERAMICS JAPAN 6 [10] 798-799 (1971)

### 美術館めぐり

## 加藤民芸美術館=現在閉館



加藤恭太郎氏の解説. 名古屋にこんな民芸美術館のあることを知っている人は少ない. 博物館, 民芸館1つない所だ(当時). 徳川美術館があるが, 尾張藩の王侯貴族の宝物ばかりで, およそ庶民の暮らしには縁の遠いものばかりである.

全国民芸館所在地(日本民芸協会のリンク)

URL <http://www.nihon-mingeikyokai.jp/pavilion/>

CERAMICS JAPAN 6 [11] 922-923 (1971)

### 美術館めぐり

## 高岡市美術館の陶器



高岡において焼かれたものに古府焼「富士形釜」内藤心月作と黒田焼「菓子鉢」陶風作がある. 古府焼, 黒田焼と戦後始められた二上焼の3つが高岡市内の主な窯である. 高岡には, 古くは縄文式土器より須恵器, 国秀寺瓦に至る発掘品としての焼物が見られるが, 国分寺瓦以来の流れを汲む伏木地方の瓦以外の焼物の伝統は続かなかつた.

CERAMICS JAPAN 6 [12] 986-987 (1971)



杉野璜月氏の解説。萬古焼といっても現在のものは四日市市を中心に三重県下中北勢全般に産出される焼物を総称して萬古焼といている。文中の林コレクションは、四日市市に寄贈された後、四日市市立博物館の企画展開催時に見ることができる。その他、四日市市文化会館常設展示室、三重郡朝日町歴史博物館、菰野町パラミタミュージアム、桑名市立博物館でも企画展が開催される。

CERAMICS JAPAN 7 [2] 114-115 (1972)



渡辺 智氏の解説。日本六古窯の1つ越前焼の振興を目的に建設された。越前焼は、奈良、平安の須恵器の時代に始まり、鎌倉時代、中世陶業地として出発し、室町、桃山、江戸、明治を通じて福井県丹生郡宮崎村、織田町を中心に栄えた。資料館には平安時代末期から現代までの越前焼と越前焼研究者水野九右衛門コレクション等約 200 点を展示している。

CERAMICS JAPAN 7 [3] 198-199 (1972)

## IV. 日本の窯業民俗

「日本の陶磁器産業をとりまく環境もこの数十年間にすっかり様変わりしました。伝統的な産地でも古くから受け継がれてきた様々な技術が失われてきました。失われつつある日本各地の窯業の民俗、技術等にかかわることがらを、極力、具体的に取り上げ記録してゆくことを旨とした」(あとがきより)。なお、本稿は数か月から1年にわたって解説されているので、掲載年と巻号のみを記載。

### 日本の窯業民俗

#### 尾張瀬戸の窯業民俗



尾張瀬戸の窯業民俗  
(瀬戸市立博物館蔵・宇治陶器図説)

平安時代に創業された瀬戸の窯業(本業)について、採土-製土-成形(轆轤, たたら作り, 植木鉢, 瓦, 便器)-絵付-くすりかけ(施釉)-焼成(本業窯, 石炭窯他)の各プロセスをイラスト入りで説明した貴重な解説。江戸時代後期に九州で量産が開始された磁器に販路を奪われて、窯が次々と減っていった。これを打開した加藤民吉についても掲載。

CERAMICS JAPAN 9 [1 ~ 12] (1974)

### 日本の窯業民俗

#### 陶業地のデザインの歩み



磁器は中国で宋代より数えて1000年、日本では江戸初期に有田で創成されてから360年(出版当時=本稿の出版時では400年経過)の歴史がある。ここでは著名窯業メーカー、産地のデザイン事情について12回にわたって説明。岩尾磁器工業(株)、有田、波佐見、砥部、常滑、京都、瀬戸、信楽、美濃、四日市、石川、日本陶器(株)=(株)ノリタケカンパニーリミテド、名古屋、益子を紹介。

CERAMICS JAPAN 10 [1 ~ 12] (1975)

### 日本の窯業民俗

#### 有田磁芸の民俗



有田郷内の伝統的な磁器の技法は、李朝系前期の陶器の技法、李朝中期の磁器の技法が創成期の慶長10年(1605)前後から寛永末年(1645)前後まで純粋に伝承されている寛永末年前後になると、李朝系磁器の技法の中に、中国的な磁器の技法がわずかながらも交流し、意匠絵模様の面には、中国明朝の磁器の影響が強く反映されている。

CERAMICS JAPAN 11 [1 ~ 4] (1976)



江戸中期の宝永2年(1705)に、筑前小石原の陶郷から柳瀬三右衛門を招いて天領日田の山郷で開窯された小鹿田窯は、現代日本の民窯の中では、最も純粹な窯場といえる。伝承されている技術内容、造られている生活用雑器の本質的な美しさというまでもなく生業の姿が純粹である。小鹿田焼技術保存会が国の無形文化財となっている。飛カンナ等装飾技法に見どころが多い。

CERAMICS JAPAN 11 [5 ~ 6] (1976)



唐津焼の第一人者、陶芸家中里太郎衛門氏の執筆になる唐津焼史。日本各地で高温施釉の焼物が作られるようになったのは、瀬戸・美濃地方と唐津岸岳地方を除いて、16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮半島出兵以後である。岸岳の古窯を岸岳古唐津と称する。古唐津からはじめて、肥前磁器発生以降の唐津まで、伝統的製陶技法を含めて解説している。

CERAMICS JAPAN 11[7 ~ 12] (1976), 12[1 ~ 6] (1977)



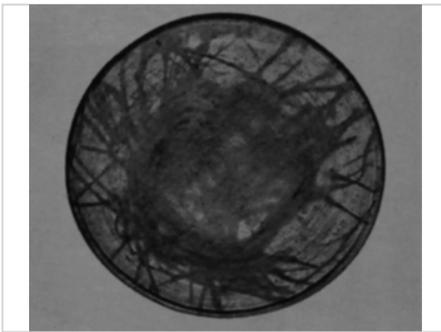
天平の昔、聖武天皇が紫香楽宮を営んだ時に、布目と須恵器で什器を作った。それが信楽窯業の始まりである。須恵器の流れを汲んだ信楽焼は、平安、鎌倉、室町、桃山、江戸初期まではいわゆる穴窯であり、一般にこれを古信楽と呼ぶ農の器であり、後に転用されて茶の湯の道具となる。徳川中期は、茶壺が名高く、大物信楽の名を天下に広めた。古信楽～明治、現代に至るまでを解説する。

CERAMICS JAPAN 12 [8 ~ 12] (1977)



知多半島古窯趾群の発生は、それに先行する灰釉陶器の生産地である"猿投山西南麓古窯趾群"の衰退に関わりをもつ。5世紀末に導入された須恵器と、それを技術的に発展させた8世紀以降の灰釉陶器の一大生産地がルーツである。天保5年(1834)、瀬戸等に遅れること約200年、常滑に連房式登窯が導入され、以後焼物は専らこの登窯によって生産されるようになった。現代は、急須、タイル、サニタリウェアが製造される。

CERAMICS JAPAN 13 [1 ~ 12] (1978)



備前焼はこの備前市伊部に生まれ育った焼物。伊部の南に位置する西大平山の南山麓付近からさらに南に向かう地域は、80基以上の須恵器の窯趾が発見されている。備前焼はこの須恵器の流れをそのまま受け継いだ。土やタキギに恵まれていたこと、気候が温暖で風雨も少なく、日照時間は長く、焼物を作るのに最も適した土地柄であった。

CERAMICS JAPAN 14 [1～12] (1979)



四日市陶業は、桑名地方に再興された萬古焼を、明治維新頃移入することから始まった。移入時の技法による製品は、現在ではわずかである。全国の著名な陶業地の製品は、「瀬戸焼」等の例が示すとおり、その土地固有名を冠して呼ばれているが「萬古焼」の名は、その発生、展開、継承生産されている土地の名前によるものではない。本稿では、木型を使った特異な型萬古の製法についても述べられる。

CERAMICS JAPAN 15 [1～12] (1980)



大聖寺藩初代藩主前田利治は後藤氏に命じ土器を焼いたとある。この土器は土物（陶器）のことで、古九谷の始まりである。古九谷廃絶後100余年を経て、加賀藩領に再び陶煙を見ることができたのは、文化4年(1807)のことであった。天下の名工青木木米が文化3年(1806)金沢に招かれた。復興なった九谷焼は、今日の隆盛を得た。

CERAMICS JAPAN 16 [1～4], [6～12] (1981)

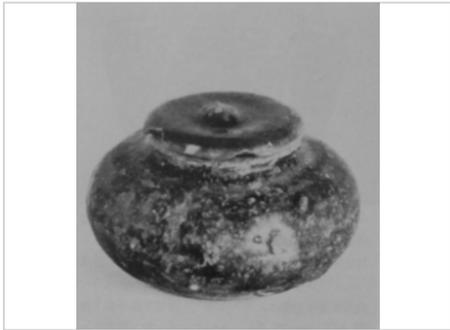


須恵器は窯炉を用いて高火度焼成する、我が国最初の硬質陶器である。5世紀に朝鮮半島の工人によってもたらされたこのやきものは、それ以前の土師器にとって代わり、平安灰釉陶（瓷器）が成立してもなおしばらくは並行しつつ12世紀頃まで焼成された。本稿は番外編として、須恵器の再生に挑んだ記録である。

CERAMICS JAPAN 16 [11～12] (1981)

## 日本の窯業民俗

## 美濃の窯業民俗



多治見近郊の各務原市須衛町は、須恵器の一大生産地であったが一時期を過ぎると、ぱったりと生産が途絶えた。やがて奈良、平安時代を迎えると、愛知県の猿投町の丘陵地帯で灰釉陶器の生産がこれまた朝鮮からの渡来した技術者の集団によって始まり、桃山期に入ると、可児、土岐市の丘陵地帯では大窯から地上式の登り窯と革命的な文化的香りの高い作品が生まれた。

CERAMICS JAPAN 17 [1 ~ 12] (1982)

## 日本の窯業民俗

## 伊予の窯業民俗



日本国愛媛の石鎚山裏漢谷から12000年前のやきものが出土。たちまち世界最古の王座を占めた(注: 現在では豆粒文土器13000年前も発見されている)。瀬戸、肥前等に比してこの地の陶磁の歴史は新しい。砥部磁器は、安永6年(1777)の創業。それに先行の陶器焼成は数十年さかのぼり、江戸中期、二百数十年前のことである。

CERAMICS JAPAN 18 [1 ~ 12] (1983)

## 日本の窯業民俗

## 琉球の窯業民俗



琉球文化の特質は、日本本土はもちろんのこと、北(朝鮮)からも、西(中国)からも、南(南方諸国)からも影響を受けながら発達する。琉球古陶には、シャムや安南の施釉技法が見られたり、宋赤絵を思わせたり、朝鮮の三島手があったりして技法は多技に及ぶ。琉球王朝尚貞王時代天和2年(1682)に知花、宝口、湧田の三窯が現在の壺屋に移設統合され、この地に南方、安南、中国、朝鮮系の技術技法が集大成された。

CERAMICS JAPAN 19 [1 ~ 12] (1984)

## 日本の窯業民俗

## 我が社のデザイン、今

下記の主要な陶磁器メーカー、ガラスメーカーのデザインについて紹介する番外編。

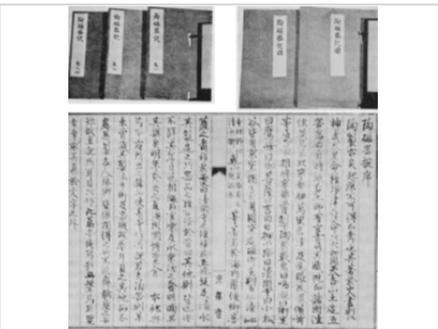
(株)ノリタケカンパニーリミテド、佐々木硝子(株) = 現 東洋佐々木ガラス(株)、鳴海製陶(株)、岩城硝子(株) = 現 AGC テクノガラス(株)、深川製磁(株)、岩田工芸硝子(株) = 岩田家のガラス工芸、伊奈製陶(株) = 旧 (株) INAX 現 (株) LIXL、(株) 各務クリスタル製作所 = 現 カガミクリスタル(株)、白山陶器(株)、ハリオ(株) = 現 HARIO(株)、ニッコー(株)、HOYA(株)、ダントー(株)、宮尾陶器(株) = 現 (株) ミヤオカンパニーリミテド、志野陶石(株) = 倒産、カメイガラス(株) = 倒産、(株)たち吉、(株)山村硝子 = 現日本山村硝子(株)、光和陶器(株)、福岡特殊硝子(株)、加藤工芸(株) = 倒産、東洋ガラス(株)、上越クリスタル硝子(株)

CERAMICS JAPAN 20 [1 ~ 12] (1985)



北陸における中世の代表的なやきものには、加賀、珠洲、狼沢、それに越前の4つがある。これらは、主として須恵器系あるいは瓷器系窯業の影響を受けた。越前焼が広く一般に知られるようになったのは戦後のことで、昭和23年(1948)に小山富士夫氏とともに執筆者が古窯跡を踏査し、「中世の六古窯」の一つとして東京国立博物館において発表した。越前焼の製作技法では、捻じ立てが有名。

CERAMICS JAPAN 21 [1, 4, 6, 7, 9, 11, 12] (1986)



京都は昔も今も日本の陶磁器文化の中心である。京都の焼物に関する書物は枚挙にいとまがないが、京都陶磁器協会では藤岡幸二さんが中心になって、この京都の陶器屋さんの明治以降、昭和30年(1955)半ばに至るまでの動向を昭和37年(1962)に「京焼百年の歩み」としてまとめられた。付属の「陶磁器説」は、当時のイラストを含め復刻され秀逸である。なお、百年の歩み本篇は、京都陶磁器会館のホームページからダウンロード可能。URL <http://kyototoujikaikan.or.jp/100years/>

CERAMICS JAPAN 22 [1 ~ 12] (1987)



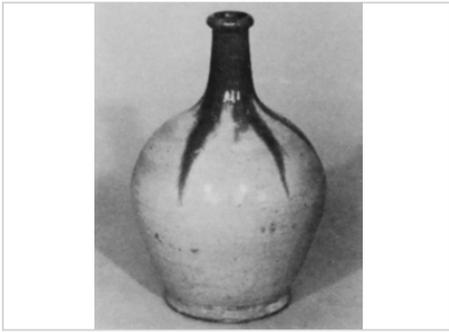
文禄2年(1593)に播磨国より会津にもたらされた瓦製造技術は、技術的に特段の進歩がなく、依然として焼締りの悪い瓦を製造し、その間、五十数年におよんでいる。会津松平保科正之が寛永20年(1643)に入部し、屋根瓦の品質改良を企画して、後の会津本郷焼の祖水野源左衛門を招へいた。会津本郷に陶器の製法が伝来し藩窯として赤瓦および茶器類をつくり始めてから、約20年後には民窯も起こり、藩の奨励等も受けて順調な発展を遂げた。

CERAMICS JAPAN 23 [1 ~ 12] (1988)



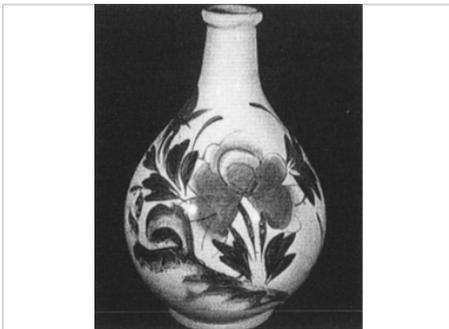
現在の益子焼は嘉永6年(1853)大塚啓三郎が創始したと伝えられている。安政2年(1856)(万延元年(1860)ともいわれる)に寺山白土(矢板市)による白掛けが案出された。製品は馬車・船で鬼怒川を經由して江戸へ出荷販売された。明治初期には会津や京都の職人が入り仕事も巧みになり窯も20余に増え、浜田庄司の民芸運動の発展とともに現代に至る。

CERAMICS JAPAN 24 [1 ~ 6] (1989)



現在の笠間焼は、江戸時代、安永年間(1772～1780)に箱田村の久野半右衛門道延が始めたといわれている。笠間藩主牧野貞喜(1792～1817)は、寛政5年(1793)頃から産業奨励として「お庭焼」を下屋敷の近くに開窯した。製陶業は次第に発展し箱田焼(笠間焼の前身)といわれた。その後、仕方窯の一つであった関根窯を譲り受け、生産に当たるとともに積極的に販路を広げ、箱田焼、穴戸焼の名が、笠間焼として知られるようになった。

CERAMICS JAPAN 24 [7～12] (1989)



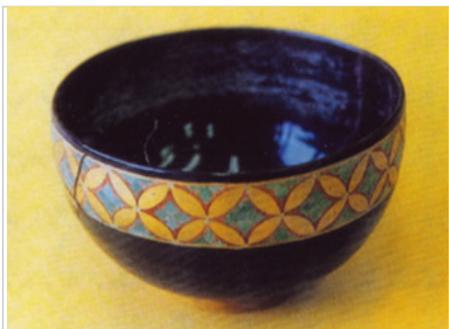
長崎県の波佐見町は、美濃地区や有田町等と並ぶ全国有数の陶磁器産地である。波佐見焼の起源は慶長4年(1599)が定説。約400年前に始まった波佐見焼は、江戸時代には有名な「くらわんか茶碗」の中心的な生産地として発展し、また江戸末期から明治時代にかけては碗や皿類の他、徳利や仏具等さまざまな日常生活用具を生産した。

CERAMICS JAPAN 25 [1～6] (1990)



丹波立杭焼は瀬戸、常滑、越前、信楽、備前とともにいわゆる日本六古窯の一つ。古代の丹波國には土師が存在し、焼物を焼いていたことを確かめることができる(日本書紀)。昭和の初年、杉本捷雄らによって手がけられた丹波焼研究の縁によって、柳宗悦らの民芸運動の中に古丹波の美の世界が大きな位置を占めかけていたときで、都市部における民芸店の開設気運も高まり、市場網の確立も時勢に乗ることを容易にした。

CERAMICS JAPAN 25 [7～12] (1990)



各地で開花した陶器は京都に運ばれ、中国・朝鮮の陶磁器も輸入され、貴族社会で愛用された。この京都に新しい陶器が誕生した。長次郎の楽茶碗である。17世紀江戸時代に入ると京焼に特色ある新作が誕生する。野々村仁清の作品である。陶工も奥田穎川、清水六兵衛、尾形周平、青木木米、欽古堂亀祐、高橋道八、永楽保全、永楽和全等多彩な名工を輩出し、京焼の飛躍的な発展をみせる。煎茶の発達は磁器の需要を生み、多く創作された。

CERAMICS JAPAN 26 [1～12] (1991)



三川内焼を述べるなら、平戸藩窯およびその流れが中心となる。三川内焼は元来平戸焼と称し、今でも多くの窯元は窯名に平戸を冠している。現在、三川内焼とは佐世保市の三川内山、江永、木原およびその周辺で焼かれているものを総称して三川内焼と呼ばれ、この三地区は同じ肥前窯業圏を構成する波佐見町（波佐見焼）、有田町（有田焼）と隣接する。本稿では平戸から三川内に至る磁器焼造までの沿革について概観する。

CERAMICS JAPAN 27 [1～3] (1992)



一楽・二萩・三唐津といって喧伝され、萩焼が茶陶を代表するやきものであることを雄弁に物語る。桃山時代利休によって確立された「佗び茶」の「高麗茶碗」の系譜を引く茶陶としても広く世に知られている。萩焼は、近世初頭以来萩藩主毛利家の御用窯として、松本村中ノ倉（現萩市椿東）に開窯せられ、その後大津郡深川村三之瀬（現長門市深川湯本三之瀬）の地に分窯し、現代に継承発展してきた李朝の陶技を伝承する。

CERAMICS JAPAN 27 [4～12] (1992), 28 [1～3] (1993)



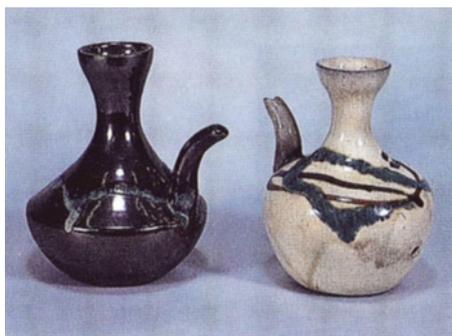
出雲地方で本格的に窯業が始まるのも江戸前期からで、途中危機にひんした時期もあったが、その流れは今日まで受け継がれている。出雲焼とは、地域性でいえば出雲地方で作られた陶磁器ということになるが、一般には楽山焼と布志名焼の2窯を出雲焼と呼ぶのが通念となっている。

CERAMICS JAPAN 28 [4～8] (1993)



島根の焼物は、一般に出雲焼と石見焼とに大別してとらえられ、それは地理的・歴史的背景から生じる作風が全く異なっていることによる。石見焼の特徴は、赤い色を呈した石見瓦と大がめ等の日用粗陶器にある。

CERAMICS JAPAN 28 [9] 946(1993)



島津義弘が文禄・慶長の役(1592～1598)で朝鮮から連れ帰った陶工らは、鹿児島市前之浜、串木野市島平、東市来町神之川、加世田市小湊に家族を伴い上陸した。龍門司の川原芳工は肥前～京都～伊勢の陶業視察後、豎野の色絵復興のため栗田の錦光山窯で色絵具製法を習い、鹿児島花倉で色絵具の試作を行う。沈寿官は個人窯(玉光山)を設けて、失業救済と苗代川振興に努め、白薩摩を主とする窯を築き、苗代川白薩摩隆盛の基となった。

CERAMICS JAPAN 28 [10～12] (1993), 29 [1～3] (1994)



佐渡の本格的な施釉陶器の創始は、19世紀初頭で、寛政12年(1800)に開窯したとされる金太郎焼だった。佐渡の近世窯業史は、この無名の一窯主によって誕生する。金太郎窯は、明治26年(1893)に没する5代目金太郎まで約80年続いた。金太郎窯を最後に買い取ったのは、同地で素焼の風間窯を始める風間泰蔵だった。

CERAMICS JAPAN 29 [4～9] (1994)

## V. 陶磁器資料館めぐり

「日本人の美意識とセラミックス製造技術とがうまく融合し、ヨーロッパへ輸出された「古伊万里」のように、「現在の感性」と「ファインセラミックス」を融合調和させ、さらに、AI を使用または組み込んだ製品またはソフトが世界各地に輸出され、賞用され・・・」(1987年まえがきより。) 本稿は、11月号1冊まるごと特集号となっている。

### 陶磁器資料館めぐり

#### 陶磁器の科学と歴史 (山崎 一雄)

考古化学も研究され、「醍醐寺五重塔壁画の研究」で高名な山崎博士の総論。縄文土器、須恵器、彩釉陶器、灰釉陶器から中世陶器・近世陶磁器に至るまで、陶磁器発展の歴史について述べられている。文中用語で、陶器、陶磁器、磁器、瓷器の使い分け等、科学者としての配慮がうかがえる。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 934-938 (1987)

### 陶磁器資料館めぐり

#### オランダ東インド会社と日本の磁器 (深川 正)



(株) 香蘭社社長(当時)でもある氏の卓見は、著書「世界の中の有田」、「古伊万里の美とロマン」、「海を渡った古伊万里」からうかがい知ることができる。東インド会社を通じて欧州に輸出された古伊万里が、インドネシアやケープタウンに眠る謎、VOCマークの巧拙について語っている。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 939-945 (1987)

### 陶磁器資料館めぐり

#### 益子参考館 (濱田 映子 / 副館長)

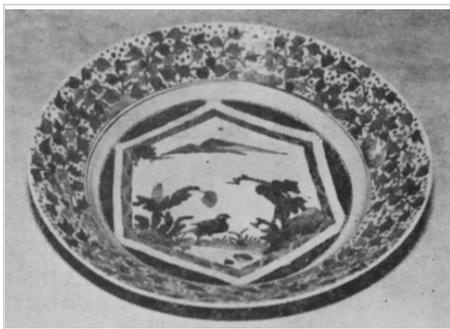


編者の言になるが、2011年3月11日発生した東北地方太平洋沖地震では、益子焼産地の窯も倒壊し、同館も大きな被害を蒙ったが漸く復興することがなかった。陶芸家 濱田庄司が自ら参考とした品々を、一般の人々にも「参考」にしてほしいとの意図で開設された美術館。濱田の自邸・工房の一部を活用し、彼が生前に蒐集した品々と自身の作品をはじめ、僚友河井寛次郎、バーナード・リーチらの作品等を展示。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 946-947 (1987)

陶磁器資料館めぐり

寺井町九谷焼資料館＝現、能美市九谷焼資料館（南繁正 / 技術指導員）



加賀藩の支藩大聖寺藩初代藩主前田利治の命により後藤才次郎が現在の江沼郡山中町九谷の地に窯を築き、田村権左衛門を指導して明暦元年(1665)頃に始めたのが、古九谷の始まり。九谷焼の歴史を振り返るとともに、過去の名作を鑑賞し、さらに現代九谷の新しい息吹を広く一般に公開するため1982年にオープン。補足だが、加賀市に石川県九谷焼美術館があり、国宝の仁清雉香炉は、石川県立美術館に所蔵される。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 948-949 (1987)

陶磁器資料館めぐり

福井県陶芸館（田中 照久）



日本六古窯の1つ越前焼の振興を目的に建設された。資料館には平安時代末期から現代までの越前焼と越前焼研究家水野九右衛門コレクション等約200点を展示している。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 950-951 (1987)

陶磁器資料館めぐり

岐阜県陶磁器陳列館・岐阜県陶磁資料館  
現、多治見市美濃焼ミュージアム



地域窯業の振興と美濃焼を学習できるように、美濃古窯出土資料および現代陶器の保管ならびに展示をしている。特に常設「美濃桃山陶器」展示と「美濃焼千年の流れ」展示は来館者に好評。美濃地方には他に、同多治見市内に岐阜県現代陶芸美術館やこども陶器博物館、瑞浪市陶磁資料館、土岐市美濃陶磁歴史館（併設織部の里元屋敷陶器窯跡）等、見どころがたくさんある。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 952-953 (1987)

陶磁器資料館めぐり

常滑市民俗資料館



中世より今同に至るまで連綿として続く窯業を地域の基幹産業として持つ地域性から、一般的な概念の民俗資料館とは多少趣を異にし、常滑の窯業史、窯業民俗に焦点を絞り込んだ展示・企画がなされるという点に最大の特色をもつといえる。江戸時代も後半期に入った頃より工芸品的焼物が作者銘を伴い出現し始める。常滑元功斎、上村白鷗、赤井陶然、伊奈長三といった名工が出現する。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 954-955 (1987)



信楽は、紫香楽宮の造営と大仏造立の地となったと考えられる。当時、信楽の土を使い祭祀用、宮廷や上流貴婦人用の須恵器が、渡来人の指導によって焼き始められ、事実紫香楽宮の跡と考えられる信楽町宮町地区において須恵器や土師器の陶片が数多く発掘されていることから、信楽のやきもの造りは、天平の昔に始まる。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 956-957 (1987)



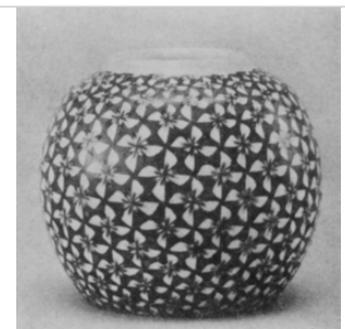
京都は伝統工芸の都である。京焼も京都の伝統工芸を代表する業種となっている。洗練された意匠とみがきあげられた技術は京焼の最大の特徴である。京都のやきものは、他の京の工芸と比較するとやや遅れて安土桃山時代から江戸初期の時代に誕生した。さまざまなデジタルアーカイブが公開されている。2017年4月28日に新しく「京都学・歴史館」として移転・新築オープン。URL <http://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/index.html>

CERAMICS JAPAN 22 [11] 958-959 (1987)



約1000年の歴史を持った備前焼を中心に、中世から現代にいたる焼き物作品や関連資料を紹介している。「人間国宝館」では、備前焼で人間国宝に認定された金重陶陽、藤原啓、山本陶秀、藤原雄、伊勢崎淳の5名の作品を紹介。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 960-961 (1987)



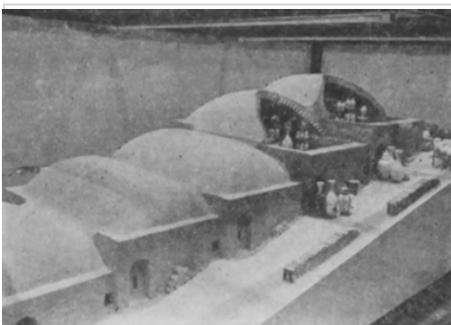
砥部は、愛媛県松山市の南に接し、起伏の変化に恵まれた陶郷である。砥部で現在営まれている窯元は大小併せて70余あり。ほとんどが磁器を製造している。砥部地方には古墳群があって群集古墳から出土した遺物が多く、それらを焼いたと考えられる窯跡も発見されている。砥部焼の起源は陶器に始まって磁器に及んでいる。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 962-963 (1987)



唐津焼, 有田焼の他, 九州全域にわたる陶磁器の専門的な博物館である。歴史的・美術的・産業的に貴重な陶磁器資料を収集・保存・展示している。また佐賀県内の古窯跡の発掘調査, 陶芸文化に関する講演会の開催等の教育普及事業を定期的に行っている。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 964-965 (1987)



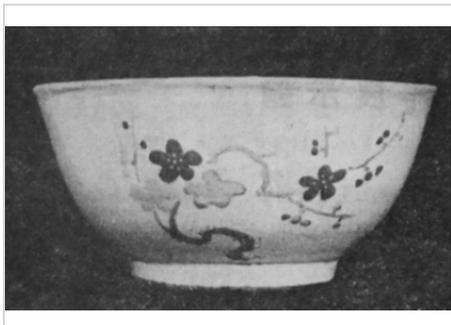
有田は日本磁器発祥の地といわれ, 有田の歴史そのものが磁器の歴史ともいえる。今なお町全体が焼物に包まれ活発な動きをみせている。この地方では古くから陶器が焼かれていたが, 17世紀初頭, 朝鮮から渡来した陶工, 李参平によって泉山に良質の白磁鉱が発見され, 有田における磁器生産は質・量ともに目覚ましい発展を遂げた。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 966-967 (1987)



薩摩焼の歴史は, 朝鮮出兵(文禄・慶長の役, 1592～1598)に参加した島津義弘が朝鮮陶工を連れ帰ったことに始まる。島津義弘は茶道にも造詣が深く, 文化・産業の振興にも力を注ぎ, 両役に際しても朝鮮の文化, 産業技術の導入を図った。陶工達は, 慶長3年(1598)鹿児島前之浜, 東市来神之川, 串木, 野島平等に上陸した。薩摩焼が島津氏の御用窯として始まったこともあり, その後の居城の移動や藩の方針によって各地に多くの窯場ができた。薩摩焼の特徴の一つは, その種類が多いことである。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 968-969 (1987)



沖縄では現在7か所の古窯跡が知られている。那覇の湧田窯, 首里の宝口窯, 中部では恩納村の山田窯, 読谷村の喜名窯, 沖縄市の知花窯, 北部では名護市の古我知窯, 大宜味村の作場窯がそれぞれである。壺屋は上焼系と荒焼系の二つの大きな技術を踏襲した。「上焼」(施釉)は「球陽」という史書に元和3年(1617)薩摩在住の朝鮮陶工一六, 一官, 三官を招いて製陶技術を指導という記録があり, 今日まで3百年間続いてきた。他に那覇市立壺屋焼博物館もある。

CERAMICS JAPAN 22 [11] 970-971 (1987)

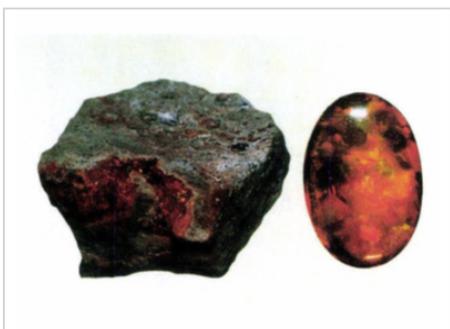
本稿で紹介できなかった館も含め、78館が掲載されている。

## VI. 博物館めぐり

本特集は、陶磁器に限らずセラミックス協会会員の興味を引く展示物を所蔵する博物館の紹介を行っている。特集末には、掲載分を含み紹介できなかった博物館の一覧表をカテゴリ別（鉱物系 12 館，陶磁器系 39 館，ガラス系 11 館）に掲載。

### 博物館めぐり

#### 秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館



秋田大学工学資源学部キャンパス裏手の丘陵中腹にある全国唯一の鉱業博物館は、工学資源学部の前身である秋田鉱山専門学校（明治 43 年（1910）設立）の創立 50 周年記念事業として、同窓生、教職員、各種団体からの寄付金により昭和 36 年（1961）に設立。めずらしい鉱物が見られる。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 898 (1999)

### 博物館めぐり

#### 山梨宝石博物館



甲府は宝石の集散地として世界的に有名になったが、これは太平洋戦争により廃虚と化した生産拠点から研磨技術の保存と新しい宝石貴金属産業の可能性を求めて世界の市場を開拓した先人たちの努力の賜物である。山梨宝石博物館は、これらの歴史を作ってきた人々によって設立された宝石専門博物館。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 899 (1999)

### 博物館めぐり

#### 佐賀県立九州陶磁文化館

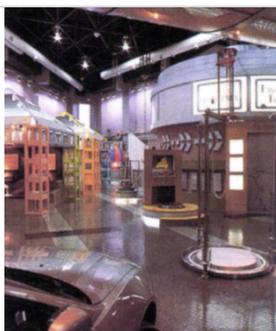


肥前陶磁をはじめ、九州の陶磁器に関し、その文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与する目的で昭和 55 年（1980）11 月 1 日、陶磁器専門の美術館としてオープン。歴史的・美術的・産業的にみて重要な資料を収集・保存・展示し、調査研究や「陶芸教室」等の教育普及活動を行っている。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 900 (1999)

## 博物館めぐり

### フェライト子ども科学館



TDK(株) 創業者斎藤憲三生誕百周年記念事業の一つとして企画され、平成10年(1998)10月にオープンした施設である。その主旨は斎藤氏の業績を紹介するとともに将来を担う子供達に体験を通じ科学に対する興味を高め、科学する心を培ってもらうことである。建物はフェライト結晶をイメージさせる六角形がモチーフ。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 901 (1999)

## 博物館めぐり

### 世界のタイル博物館



タイル研究家山本正之氏から常滑市へ「約6千点のタイル寄贈」がなされたことから「世界のタイル博物館」は始まった。INAX(現、LIXIL)は、常滑市からその管理・研究と一般公開の委託を受け、社名変更10周年記念行事の一つと位置づけ、INAXライブミュージアムの中核としてこの博物館の建設にとりかかり、1997年4月に開館した。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 902 (1999)

## 博物館めぐり

### 碍子博物館



博物館は日本ガイシ(株)の電力技術研究所の3階に設置しており、世界21か国、57社のメーカーの碍子が集められている。日本の電力事業は、誕生以来100年以上になる。この間、各種産業へのエネルギー供給という重要な役割を担い、急テンポで発展してきた。この電力の外部絶縁を、一手に引き受けている碍子の形状や性能には、電力事業の発展とともに種々改良が加えられてきた。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 903 (1999)

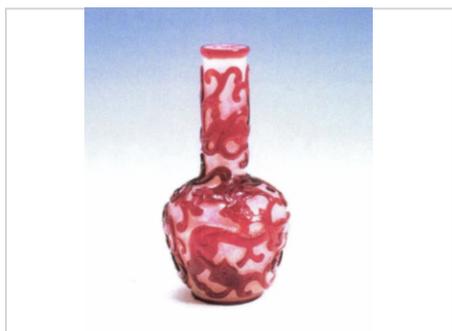
## 博物館めぐり

### ノリタケクラフトセンター (現、ノリタケの森)



ノリタケクラフトセンターは、昭和54年(1979)にノリタケ創立75周年を記念して、食器の製造工程をお客様に見ていただける工場として建てたもの。大きさとしては当社の量産工場の10分の1程度の小規模なもので、そのため、自動化された大型機械やベルトコンベヤー等は使用しておらず職人の手作業に頼った工程を間近で見ることができる。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 904 (1999)



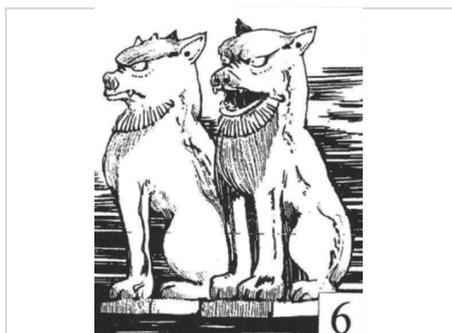
京セラ(株)は、文化事業の一環として地域文化の発展を願い、平成10年(1998)10月に新本社ビルの1・2階に、京セラファインセラミック歴史館と京セラ美術館を開館した。昭和34年(1959)に創業して以来ファインセラミックメーカーとして、その技術開発を進めてきた。ファインセラミックスは先端産業分野において、欠かすことのできない工業材料の一端を担う重要な役割を果たしている。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 905 (1999)



山口県小野田市は、日本の近代窯業の一端であるセメントで内外に広く宣伝された町である。ここでは、「窯業の町、セメントの町」小野田について紹介したい。小野田地区は古くより窯業と関係のある町で古くは塚の川古墳に代表される古墳(円墳)地帯や、大須恵・焼野等に古墳跡があり土器等が発掘された。また松山窯跡は、6世紀頃の登り窯の跡で、長門地方最古であるとの調査報告もある。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 906 (1999)



高橋実氏のルポによる岐阜県陶磁資料館、幸兵衛窯、清山陶舎、豊蔵資料館(人間国宝 荒川豊蔵)の案内。長く名古屋工業大学の多治見研究所で教鞭をとっていたため、産地事情がつぶさに見てとれる。

CERAMICS JAPAN 34 [11] 907-910 (1999)





▶ 各内容の詳細は各記事の囲みをクリックしてご覧ください.



# CERAMICS JAPAN

BULLETIN OF THE CERAMIC SOCIETY OF JAPAN

公益社団法人 日本セラミックス協会

〒169-0073 東京都新宿区百人町2-22-17

TEL:03-3362-5233 FAX:03-3362-5714 E-mail:shoseki@cersj.org

2018年3月発行